

草庵仏教

第110号
(発行日)
1999年8月1日
(発行所)
真宗大谷派 念佛寺
〒6638126 西宮市
小松北町1-2-3
電話・FAX (0798)
41-5346
(発行人)
土井紀明

《 聞法会ご案内 》

- * 同朋の会 (念佛寺)
8月は休み
.....
- * 聖典講座(浜屋仏壇店)
第1土曜日午後3時
- * 念仏座談会(念佛寺)
8月は休み

性にしたらごう、これを道という

一、中庸の言葉

中国の古典に「中庸」という書物があります。これは儒学の書ですが、この中に「性の命、これを性といひ、性にしたごう、これを道といひ」という有名な言葉があります。故金子大栄師はこの言葉を「法話のなかでしばしば引用し、この言葉に即して念仏者の生き方を語っておられました。今回は、金子師のご教示を参考にしながら、私なりにこの中庸の言葉を通して、人の生き方を考えてみたいと思います。

二、性とは

ここで「性」というのは、より具体的に言えば、私たちの性格とか性分とか個性とか素質といったものでしょう。それにしても、私たちは自分の「性」に悩まされることが多いのではないのでしょうか。もっと性格が良かったらとか、もっと天分が豊かだったらとか、あるいは人間性の豊かな人間であればよかったのか、か、そういうことに悩むのです。一つもこういうことに悩まないというのとは、天分に恵まれた人かそれとも「よりよくありたい」という望みの無い人か、どちらかでしょう。そうした素質とか性格といふものは、どうにも変えられないのですが、それを

仏教ではさしずめ業因縁のゆえといわれるのでしよう。すなわち過去の私どもの行いを核に、さまざまに加わって来る諸縁の集積が私の「性」すなわち個性になっていくと、仏教では説かれています。今日の科学では遺伝子DNAのせいというのでしようか。過去の私からの集積ですから、現在の私がそれを変えることは非常に難しいことです。このことは、現在の私にとつては、どうしてみようもないことと感ぜずにはおられません。それで、儒教では「性」が「天命」すなわち天命といわれるのだと思います。

三、性にしたらごう

さて、どうしてみようもない私の性向は、これを受容して生きよというのが「性にしたらごう」ということではないでしょうか。自己の性質・性分は変えられないものではない、それをいくら悔やんでも、嘆いても何もうらやまない。それよりも自分の受け入れた限界をそのまま認め、受け入れることを「性にしたらごう」といわれたのでありましょう。言わば「性にしたらごう」とは、まず、個人の性格や素質は私に与えられた分限と受け取れと言われ、それが「天命」であるからと「儒教ではいう

四、性に順うのを道という

さらに積極的に言えば、「性」は性分として、私の分限であります。その分限を尽くしていくことが望ましいし、そういう生き方が人として本来であるというので、「性にしたらごう、これを道という」といわれるのではないのでしょうか。道というのは人として本来の生き方というのでしよう。

五、分を尽くして役に立つ

「私は私らしくしか生きられない」ということが、私に与えられたこの世での分です。分は分限であり限界であり、同時に分は、分担でもあります。役割でもあり、私には、この世の中で受け持つ分があります。この世はみんなそれぞれがそれぞれの分を担い、それぞれがそれぞれに、それぞれで力を尽くしていき、それが誰にでもできることであり、それが世の中のご用を勤めることにな

六、性格に伴う自我心の浄化

ただここで問題なのは、そのようになるかというところ、そうはいえませんが、人間は我執我愛の心によつて、「その人らしさ」いわば個性的な人生に、「汚濁(毒)が混じるのです。私らしく生きるのが自然であり、無理が無いのですが、そのなかになに金銭欲や名声欲や権力欲などの我執我愛の情念が色濃く交じるのです。そのために、個性的に生きることに必ずしも世の中全体の幸せにプラスにならない、かえって世を濁らせ、またその人自身の生き方も利己的な傾きが強くなるのではないのでしょうか。

己の性質にそつてしか生きられないけれども、教法によつて己の心に巣くう利己心の毒を批判されつつ、仏の大慈悲のまことの中で、お念仏の人生を歩むことが求められます。己の性(たち)は与

【 孟蘭盆会法要 】

8月15日(日)
午後2時始まり

(どなたでも自由にお越し下さい。
念佛寺は西宮市の小曾根線沿いの新しい
コープから3分。分からなければコープ
から電話して下さい。迎えに参ります。)

(お休みのお知らせ)

8月22日同朋会
8月21日念仏会
は休ませていただきます。)

えられた分限ですが、その分限を仏のお心に照らされ、みずからの個性にひつついて、「自我の心」を慚愧しつつ、仏の大悲を仰いで生きるところに、分限を尽くしていくまが「道」となるのではないのでしょうか。

個性的な生き方も、もし我執我愛の心に振り回されるなら、人の個性はたちまち頑固な姿に変形してしまいます。自己主張が強くなり、いたずらに対立的な人間関係が生じます。

七、個人と全体の関係

次に個人の分を尽くすことと全体との関係について考えてみます。

世の中は一つの有機体とみることが出来ます。すなわち、世の中の様々な領域はお互いに関わり合っています。行政、農業、漁業、工業、金融、建築、医療、教育、芸術、さまざまな領域は、それぞれのパートでありつつ、お互いが深く関わり合って社会は構成されています。

ちょうどそれは身体が、様々な器官や機能や部分がお互いに関わり合って、始めて生きる事ができるようなものです。

それです。身体が健康であるためには、それぞれの器官が十分に機能することによって保たれます。心臓は心臓の役目を果たす。胃は胃の役目を果たす。血管は血管の役目を果たす。神経は神経の役目を果たす。それらによって身体全体が健全である事が出来ます。

私たちの社会全体が健全であるか病むかは、社会を構成している個人の人々が、そのパート・パートでどのように働くかに深く関わってきます。それです。私たちが社会の中で、ごく小さな仕事しかできないと嘆いたり、軽蔑したりして、与えられる日々の仕事をいい加減にするなら、それは社会全体の健康に悪影響を及ぼします。社会が病むかそれとも健全であるかは、人間個々の日々の営みが病んでいくか正しいかにつながってきます。

分を尽くすという事は、たとえ銀行員はお客さんのお世話を親身になつてさせていただき、お客さんが困ることのないように配慮して勤めるという事です。物を流通して、それによってお互いの生活がしやすくなるように、自然を含めた社会全体の安定に寄与するような経営をつねに考慮する事が大事といえます。

こういうことは、何かあまにも理想的であつて、空想的な考えであると思われませんか。

しかし、自分の企業だけの利潤を考えて、全体の安寧を考慮しない時、それは周り回ってついに自分の企業をも駄目にしてしまいます。このことは現代社会においてもよく分かります。たとえば、自企業の生産利益だけを考え、有毒な汚染物質を垂れ流して、かえりみないなら、その企業は一時的に大儲けをして

も、後には社会的な信用を失つたり、巨額な賠償を負担しなくてはならなくなります。土地融資によって巨額な利益のみをもちこんで狂奔した証券会社や銀行が、バブル崩壊後経営破綻をきたしてしまつた。これも社会全体の福利という社会的使命を忘れて、目の先の暴利を貪つたからであります。

八、社会全体の平安を祈る

ただ、部分を尽くすといつても自分の身辺だけにのみ関心をもつのではなく、いつも自然環境を含んだ社会全体の幸せを視野に入れ、世界全体の動向やあり方に関心を払いつつ、今与えられている自分のできる仕事において自己の能力を生かすことであります。社会全体の平安に無関心であることは部分をあらぬ方向に進ませてしまうことになりかねません。

九、結語

結論的にいえば……人にあります。それは変えよう

と思つても変えることが容易ではありません。その人の性質や素質は一面はその人の限界ですが、同時に与えられた私の分限であります。与えられた分限を尽くす人生こそ、現実的であり、出来得ることでありましょう。

ただそこで大事なことは、自己の心に潜む利己心をきちんと認識し、この毒性を自己批判しつつ、大慈大悲の阿彌陀仏のお心に触れて生きることでありましょう。

お念仏とともに社会全体の平和を常に配慮しつつ己の分を尽くす、そこに「道」があると思ひます。

ちなみに、七月二十五日のNHKテレビで、世界的なチエロ奏者でロシアの指導的な知識人であるロストロポフイチ氏が、二十一世紀への提言として「何も大きな事をもくろむ必要はない。一人ひとりが自分の置かれてある場所で、小さな一歩を前進させていくことだ」と言つていました。(文・土井)

親鸞聖人御旧跡参拝奉仕団募集

*親鸞聖人の御旧跡の各所を参拝することを通して親鸞聖人のご生涯とその教えに学びます。

期間 十月十二日から十四日までの二泊三日
宿泊 東本願寺内同朋会館
費用 一九三〇〇円(期間中の全費用)
締め切り 九月二十四日
集合場所 JR尼崎駅

*申し込みは念佛寺へ。一人でも参加出来ます。本願寺に泊まって、親鸞聖人の遺跡を訪ねませんか。



桂巻 (C)SHOGAKUKAN INC.

【寺院ニュース・雑感】

*七月三日は浜屋での聖典講座を休み、大阪教区第二組の推進員養成講座終了後の推進員の研修会に出席。座談会が二班に分かれて催された。座談会の雰囲気は、皆さんがしばらくぶりの会合のせい、話があまり弾まなかった。座談会の難しさをあらためて感じた。

*七月二日。大阪のフェスティバルホールで開かれた「宗教者永久祈念コンサート」に行く。入場券は知人からもらっていた。第一部は曹洞宗の青山俊童老師の講演であった。青山僧様のゆつたりとした柔らかな語り口と「捨ててこそ」という厳しい内容とが一体となった尊いお話であった。真宗との違いと共通点を感じつつ聞かせていただいた。第二部の演奏の前に、座禅の指導がなされた。舞台正面に福井県発心寺の原田雪溪老師とお弟子が数人、模範としての座禅をされた。お弟子はほとんど外国人。その後、曹洞宗の声明とジョイントして、ドイツ人の作曲した曲が、大阪フィルによって演奏された。曲自体は私にはもう一つ感動がなかった。むしろ曹洞宗僧侶の般若心経の声明は大変良かった。